

「温故知新」南港野鳥園から、そして未来へ・・・

文 加賀まゆみ(夢洲調査グループ)



写真-1 撮影年は1969頃。通称「南港7人のサムライ」と呼ばれていた、守る会起ち上げの頃の仲間たち。左から有田八郎、木村力、辻田寿夫、塩田猛、平松山治、西村順吉、上田恵介（敬称略、提供：上田恵介日本野鳥の会会長）

2022年9月末、夢洲への立ち入りは、危険を理由に許可されなくなつた。すでにヨシ原は埋め立てられ、早晚この日が来ることは覚悟していた。調査がなくてもやることは次々出てくる。が意欲がわかない。現地の自然から充電させてもらつていたことをつくづく実感する。

11月、3年ぶりに開催された自然史フェスティバルで、夢洲・大阪湾岸の水鳥をテーマに、野鳥の会大阪支部とシンポジウムを共催。その中で「南港の野鳥を守る会」について日本野鳥の会の上田恵介会長が話された。守る会発足から野鳥園開園までの十数年、どのように彼らはモチベーションを維持し続けられていたのか。以前から気になっていた私は、初対面の上田さんに「当時の話をもっとゆっくりお聞きしたいのですが」と図々しくお願いをしたところ、その場で快くOKをいただいた。

じつは公開での座談会を考えていたのだが、当時のメンバーが集まるのも久しぶりで、そもそもどういう話をしてもらつたらいいのか、私たちにもわからない。まずは内部学習会と位置づけ、彼らの雑談を私たちが傍聴させてもらい、その後ゆっくり考えようということになった。守る会当時から活動している栗谷理事が連絡や段取りをし、1月

17日、上田恵介さん、酒井ますみさん、那須義次さん（昆虫（蛾）の図鑑執筆）、大西敏一さん（野鳥写真図鑑）、南港ウェットランドグループの高田博さん、そして、保全協会前会長の高田直俊さん、司会栗谷理事という豪華な顔ぶれで、その同窓会は始まった。

話の詳細は割愛するが、みな口々に、野鳥園建設ができたのは、時代背景や偶然の出会いいろいろなラッキーが後押ししてくれた、という。市役所との駆け引きも面白い。守る会の代表を引き受けてくれた筒井嘉隆氏（元自然史博物館館長・保全協会初代会長・作家筒井康隆氏の父）が陳情に赴いた市役所で偶然出会った後輩が大阪市の助役で、市長に直接説明する機会を得たことや、その後野鳥園建設を公約にかかげてもらった市長が再選したこと、大阪市が調査やプランを発注した東京のコンサル会社は日本野鳥の会に仕事を下したこと、実質的には自分たちの提案が取り入れられていったこと、そして、当協会前会長の高田直俊氏が野鳥と土木の両方の専門家であつたことで計画の実戦力となつたことなど、たしかに恵まれた条件だったと思うことが多い。

それでも、幸運に見舞われるまで

南港野鳥園のできるまで

1968年暮 南港の野鳥を守る会発足準備
1969年 守る会発足、署名運動、陳情
　　絵葉書作成、公園と映画の集い開催
1970年 大阪市へ野鳥園計画案提出、守る会会員300名、
　　WWF助成金
<自然保護ユニオン：15団体で発足
　　淀川の自然を守る会発足
　　自然を返せ！関西市民連合発足
<1971年 ラムサール条約採択>
1971年 大阪市野鳥園趣旨採択（開園予定は1985年）
　　「具体的な提案」活動・市民への啓発活動・他
　　地域の野鳥園研究など続ける。
<1976年 大阪自然環境保全協会発足>
1978年 守る会活動再開 守る会事務所を保全協会内に。
　　大阪南港バードサンクチュアリへの提言
　　大阪南港野鳥園造成計画案（高田直俊試案）
1983年9月17日 野鳥園開園 19.3ha
1984年 守る会解散
2014年4月 南港野鳥園は野鳥園臨港緑地となる

夢洲の活動

2018年11月 協会で、大阪府・大阪市に要望書提出
2019年1月 理事会で現地視察
2019年5月～7月 夢洲のワークショップ開催・生きもの
　　予備調査5回
2019年7月 「市民からのアセスメント提案」「夢洲生きもの調査」
　　を継続
2020年5月 コアジサシ繁殖地の保護保全に関わる活動
2020年11月 2区湿地の保護保全に関わる活動
2021年3月 コアジサシ繁殖期の花火イベント反対の緊急声明・
　　他団体との連携
2021年8月 塩性湿地・ヨシ原の保護保存に関わる活動
2021年12月 「市民からの環境アセスメント準備書」を発表
2022年3月 万博協会環境アセスメントに対する市長意見が出される。
2022年4月 監査請求提出 5月監査請求棄却
2022年夏 環境5団体と合同で、行政各所管と協議
　　(WWFジャパン・日本自然保護協会・日本野鳥の会
　　および野鳥の会大阪支部)
2022年9月 万博前の現地調査いったん終了(通算110回)
<2022年12月「昆明-モントリオール生物多様性枠組」採択>

のスタートダッシュには目を見張るものがある。メンバーが20名以上いたとはいえ、短期間で8300名の署名を集め、守る会の会員を300名に増やし、借金をして写真絵葉書をつくり販売して資金を作るなど、その素早い行動力には頭が下がる。現代では情報拡散も署名活動もずっと楽になっているはずなのに、この違いはなんだろう？

上記の酒井さんは、今は亡き夫とともに活動に参加。お二人の自宅が守る会の事務所兼作業所だったそうだ。そういうあたたかい場所の中で、仲間の信頼関係も育まれ、お互い激励しあい、活動の持続性が保たれたのだろう。今の時代、なかなか得られない人間くさい活動基盤だ。生身の人間と人間がぶつかり合うことでしか物事が進まない時代の機動力がいかに堅牢なものか、見せつけられた思いがする。

私たちが夢洲に関わり始めてまだ3,4年だが、その間も予想外の

ラッキーがあった。コロナ禍での工事の遅滞、カジノ誘致反対の市民感情、そして昨年末のCOP15の昆明・モントリオール生物多様性枠組みだ。2030年までに陸域と海域の30%以上を保全する「30by30」こそ、「夢洲を日本のネイチャーポジティブの象徴として『万博のレガシー』とすべきだ」という声の強力な後押しになる。万博計画地は人工島夢洲390haのほぼ3割の面積で広大だ。貴重なヨシ原や湿地を含んでいる。なんと象徴的な偶然だろう！しかも夢洲は、南港野鳥園の後背地として、その埋め立て途中でラムサール条約匹敵レベルまで生物相豊かな土地となっていた。そのポテンシャルは大きい。

ただ、今の夢洲の活動を担うメンバーは、あまりにも少なく、ほぼシニア世代だ。高田元会長が調査のときに「25年たつと、現場の事を知っている人間が役所にもいなくなる。そして失敗も成功も生かされず、ま

た1から同じことをやって失敗する」とおっしゃっていた。いまならまだ間に合う。先輩の成功も失敗も学ぶことができる。

野鳥園は今年の9月で開園40周年。NPO南港ウェットランドグループの高田博さんは守る会から受け継いだバトンを、次の世代へ受け渡すのが自分の役目、と語っておられる。50年前の私たちの先輩は、「埋め立て前から、野鳥のために人工干潟をつくる」という世界でもなかなか前例のないことをやつてのけた。

今、私たちは「いったん壊した自然を再興する」という日本のネイチャーポジティブの、先駆的事例になりうるビッグチャンスを目の前にしている。だから、ちょっとでも興味を持った人は集まってほしい。明日を担う世代が、未来に残したい夢洲および大阪湾の自然を創っていくよう、私たちも緩やかにバトンをつないでいきたいと思っている。